

第25回 小川未明文学賞贈呈式

■主催/上越市 小川未明文学賞委員会 ■協賛/株学研プラス ■後援/文化庁 新潟県 早稲田大学文化推進部 上越教育大学 日本児童文学者協会 日本児童文芸家協会



小川未明文学館 館報

第25回小川未明文学賞贈呈式

小川未明の文学精神である「人間愛と正義感」を受け継ぎ、新しい時代にふさわしい創作児童文学作品を輩出する目的で創設された小川未明文学賞が、平成28年度で節目となる第25回を迎えました。これまでに延べ12000編を超える作品が国内外から寄せられ、第25回の大賞受賞者は「蝶のくれたプレゼント」を執筆した榎なほさん（写真左から2人目）に決定しました。

vol.11



目次

小川未明文学館 館報 第11号

2017年5月31日発行（年刊）

【寄稿】

小埜 裕二

「小川未明の海」

2

【報告】

文学館1年の記録（平成28年度）

6

文学館講座

10

特別展

12

【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

15

のばら vol.13

15

【文学館からのお知らせ】

16

小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

小川未明の海

小笠 裕二

上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員



一、郷土の海

上越高田における約二〇年の暮らしが、小川未明の文学の原型を形づくった。後に書かれるほう大な数の作品中には、郷土を描いたものが相当数ある。作品数以上に重要なことは、郷土での暮らしが未明文学の「思想」を形成したことである。未明文学の根幹には、高田で見た自然や人の暮らしから考えたことや感じたことが、消えない一つの詩となって生き続けた。

本稿で考えたいのは、郷土の海が未明文学にいかなる影響を与えたかについてである。北国・雪国の自然は幻想や不思議な感覚を未明に感じとらせ、創作に一つの型を与えた。物語の舞台が、北国・

雪国でなかったら、未明文学はずいぶん様子の違ったものになっていたであろう。北国を舞台にする物語において、注目されるのが海である。未明の「思想」を形作った重要なファクターが海であったのではないか。

未明は「大きな蟹」(「婦人公論」大正一一年四月号)という童話を書いている。本作は、雪の深い北国で、海岸の村へ出かけたお爺さんが大きな蟹を背負って帰ってくる話である。その蟹は見かけによらず身が入っていなかった。春になると、お爺さんの体は弱っていった。見かけによらず身の入っていない大きな蟹は、一見元気そうなお爺さんの内面の弱りと重ね合わされる。大きな蟹はお爺さんの運命の象徴でもあった。

未明は「大きな蟹」において、運命を背負って帰ってきたお爺さんが、自らの運命の軌道に従い、春の到来とは別に体を弱らせていくという小説的な主題を扱った。生や死の問題、あらがえない人の運命をテーマに未明は本作を書いた。お爺さんが大きな蟹をもらった場所が海でなかったら、自らの運命を背負って帰ってくることはなかったのではないか。

未明が一五歳位から二〇歳位の間家族で住んだ春日山神社境内に、次の詩碑(昭和三十一年一月)が建てられている。

雲の如く 高く
くものごとく かがやき
雲のごとく とらわれず

山の生活は、私には一人の友達もなく、楽しみがないのですから、小鳥を飼つたり、あるいは山の上に立つて、暗い日本海の様子を見て、いろいろな空想にふけることが、子供の時分からの私の楽しみでした。(「童話を作って五十年」)

郷土を描いた小説に、未明はしばしば海を登場させる。「北の冬」(「新小説」明治四一年一〇月)では、主人公に不思議な感動を与えた行者の登場を「此時も尚ほ、ど、ど、ど——といふ波の音が遙かに微かに聞えたのである。先刻の行者は、あの波の音の聞える、浜辺の村の方から来たやうだ。」と語る。小説「雪の丘」では、海が「私の息を苦しく止めさうに、耐へられぬ」いものとして登場する。「限らない憂鬱」「頼りなさ」を感じさせるものが海である。

小説「日本海」(「太陽」明治三九年一月)では、小学生のとき、中学生のとき、現在と三つの時期に分けて海の捉え方の変遷を述べている。小学生の時は佐渡に憧れたという。中学生の時は東洋の平和を乱す国に対する怒りから、ウラジオストックの方をにらみ、海軍士官を志願しようと思ったという。現在、海は「寂寞として、沈鬱の面影を宿して情なく冷々と人生を嘲つてゐる」という。「此の世界は陸と海との戦闘であ」り、町屋や砂山はやがて青海原のうちに葬られ、また永劫の初めに返るといふ。「日本海」では「今」の海が重要である。陸と海との戦闘という表現をとりながら、そこに人事と自然、有限と無限、生と死の対比を投影させている。海は、命の有限性を絶えず人間に知らしめる存在である。「大きな蟹」においてお爺さんが、海で大きな蟹を背負って帰ってきた背景には、

未明の高い志、情熱、信念が表された未明文学の方向性をよく示す詩碑であるが、未明が「雲」に託した種々の意味を整理・検討すると、雲に対し、無常の思いを抱いていたことが分かる。人の命のはかなさを、未明は雲と人間の対比から感得した。しかしだからこそ、未明はその思いをバネに自分の生を燃え上げようとした。雲は形体を自在に変えるところから、無常であると同時に、自由さを持つ。右の詩は、雲をそのような観点から捉えたものである。

では、海はどうか。海は波が繰り返すばかりである。未明を不可抗の運命から前へ進ませたのが「雲」であったとすれば、「海」は不可抗の運命を強く意識させるものであった。「雲」と「海」は人生の二つの諸相を、つまり生と死、希望と失望、明と暗、理想と虚無のベクトルを形作る自然の形象ではなかったか。

二、未明の海

春日山神社の境内からはくびき平野を見下ろすことができ、北へ目をやると日本海を臨むことができる。

私は十三の時分にこの城下を去って、謙信公の城址として有名な春日山に移った。そこは眼の下に日本海を見ることが出来る。背後は峨々たる日本アルプスの峻峰を望むことが出来る。高田の町も直江津の市も夜になると、灯がチラチラとして眼に迫つて来る。(「眠つてゐるような北国の町」「文章倶楽部」大正二〇年一月)

こうした海の役割がかかわっている。

「夏雲を浮べる流れ」(『少年世界』大正一四年八月)では、「草の上に座って、じつと沖の方をながめていますと、はてしないという、遠い感じがされるのでした。」「このとき、いかに、自然を偉大なものに感じたでしょう。また、人間の生活というものが、いかに多様であって、はかり知られないかと思つたでしょう」と述べている。

冬の日本海は、常に、暴風と寒気の棲家のやうに物凄く暴れ狂つてゐる。そこには、混乱があり、雲と雪と風の戦ひ以外に、空想を逞うすることができない。夜も、暴風も雪も、みなそこからやつて来ると思つてゐる。(『冬から春への北国と夢魔的魅力』初出不明、『芸術の暗示と恐怖』大正一三年七月、春秋社)

此の海辺の人達は生れたときから此の北海の自然に親んでゐます、未開な土地に安住して、人生に就て考へることもなく、神を疑ふこともなく、勿論我等は何処から来て何処へ往く……かを考へません。たゞ海が漫々として、夕日が赤い山に映つて、岸に妙な格好の黒い岩が転つてゐるのを見て、哀れとも、美しいとも思はず、さういふものだと無心に思つてゐます。(『北海』「文庫」明治四一年二月)

独り山の上に立つて、暗く、暮れて行く海の方を眺めた。海は、私に、いろ／＼のことを語つた。

ばせた海は、未明文学の中心的なモチーフとはならなかった。

一方、海の彼方は特別な意味をもつた。動かぬ海は、雲のような自由さをもたないが、海の彼方にある理想郷という意味で、雲と同じ理想を抱かせる価値をもつた。しかしその理想郷は「紅雲郷」という言葉で表されるように、やはり雲に属する世界であつた。海の彼方にある理想郷は、海の彼方にあるからこそ、海に対する意識を経由し、有限の命をもつ人間がやすらうことのできる永遠世界として願われた世界である。

未明は、無常を意識させるものを選び越えるべく努めた。無常の雲は自在の雲に、無常の海は海の彼方に、その乗り越えの可能性が示された。しかしその比重のかけ方は、雲と海では違つてくる。雲は自在の雲の方に力点が置き直され、海は沈黙の海の方に力点が置かれた。雲が希望を託すものに変化していったとすれば、海は人間の営みを消し去るものとして存在し続けた。

未明にあつて海のある北は、特別な方角であつた。自然と人間の対比を、天地の上と下の関係から捉えただけでなく、南北の方位の関係から捉えたことで未明文学は推進力をえた。イマジネーションの源泉が北にあり、その力が供給され続けることで未明文学は成長した。郷土において北が特別であつたように、東京においても北は特別な方角となつた。北を表すものの象徴が、郷土の海であつた。海は、人間の意思を越えた、大きな力、運命の存在を意識させる源泉であつた。

「お前の眺めてゐる方は、何処まで行つても暗いのだ。而して、淋しいのだ、また冬がやつて来る。お前の眺めてゐるこの海の上は、灰色になつてしまふのだ。十年、百年、千年、同じことが繰り返されるのだ。」(『秋の黄色な光り』「女学世界」大正七年一〇月)

小説「北海」に登場する海辺の人達は、生まれたときから北海の自然に親しんでいる。人生について、どこから来てどこへ行くのか考えないという。人はどこから来てどこへ行くのか、これが未明の人生の課題であつた。海はそれを知っている。無に帰るのだ、自然に帰るのだということだ。そこに住んでいる人は、もはや海を体のうちに入れ、その価値を生きている。未明はだがそれを内在化し、それを忘れず、それを乗り越えていこうとした。海は暗く、淋しい。その暗さや淋しさが人生の定めであるかのように、永遠に繰り返して伝えてくる。小川未明の海とはそのようなものであつた。

三、イマジネーションの源泉

未明が最初に海を見たのは、「自伝」(『少年の笛』序、「早稲田文学」明治四五年一月)によると、癩癩持ちであつた未明を、母がある夏の日、朝早く車に乗せて八里隔つた米山の薬師へ連れて行き、加持を受けさせた時である。「初めて海岸を通つて、蒼い、蒼い日本海を見た。静かな空に輝く、白い海鳥の翼を見た。また、名も知らぬ黄色の花がたくさん、浜辺に咲いてゐるのを見た。これらの景色は、私の心を喜ばした。」と述べている。しかし、未明の心を喜

物心ついた時分から、朝夕親しむ故郷の景色は、一木一石にして、そのあるところの位置が、はっきり頭の中に入っています。

だから火鉢に当たりながら、お話を聞いた時も、ずっと遠い北の方と言えば、あの野を超え、あの森を越えて、さらに先に海があり、そのまた海の彼方ということが、空想の目にはつきりと描くことができただけであります。(中略)ふるさとを中心として、東や、西や、北や、南を考え、遠い、近いの観念を抱いたのであります。(『初冬雑筆』「文芸春秋」昭和七年二月)

私は北向きの窓下に机を置いている。私は北に対して、特別な感覚をもっている。人生観において、どうにもならない宿命的なものを感じる。(『初冬』「文芸春秋」昭和一四年二月)

「冬から春への北国と夢魔的魅力」(前掲)において、未明は「北国の自然は、単調の底に力強い魅力を持してゐる。(中略)もし、北方の文学に、南方の文学と異なつた力があり、特質があり、とすれば、それはその自然が、人間に与へた一種不思議な力である」と述べている。「自然が、人間に与へた一種不思議な力」には、日本海の暗い海が与える「不思議な力」も含まれる。人間の意思とは裏腹に、運命の輓ひもとの前に悲しい末路をたどる未明文学からは、郷土の海の響きが聞こえてくる。未明文学は、そこを基点に立ち上がるとうとするのである。

◆文学館1年の記録◆

【展覧会】

平成28年度は、特別展を2本、小企画展（月例展示・特集展示含む）を5本開催しました。

小企画展

〈未明童話アニメーション上映会〉

〈会 期〉 3月25日～5月8日
〈会 場〉 文学館市民ギャラリー

文学館で通常上映している未明童話のアニメーション3作品のほかに、「野ばら」、「二度と通らない旅人」、「島の暮れ方の話」、「月とあざらし」の4作品を上映しました。

また、未明童話にちなみだぬり絵や折り紙、クイズが子どもたちに好評でした。

月例展示

〈小川未明の人物像について—友人・知人の言葉から—〉

〈会 期〉 2月1日～7月31日
〈会 場〉 文学館常設展示場

大正3年（1914）の「小川未明論」（『新潮』21巻4号）では、当時、文壇で活躍していた作家6人が未明の人物像について紹介しています。

特別展

〈小川未明 12冊の絵本〉

〈会 期〉 10月8日～12月18日
前期：10月8日～11月6日
後期：11月19日～12月18日
〈会 場〉 文学館市民ギャラリー
〈来場者〉 6651人

平成27年に制作された、未明童話の絵本12冊とその原画109点を、前後期の2回に分けて展示しました。

絵本は、ギャラリーまるある（東京恵比寿）の企画に賛同した、現在活躍中の作家12人と装丁家10人の手によって新たに作られたものです。フランス装という手作業の装丁で一つ一つ丁寧に仕上げられた絵本は、優しく手になじみ、読者を新しい未明童話の世界へと誘ってくれます。

来場者からは、「どの絵本も個性的でありながら、未明童話の世界観が出ていて見応えがあった」、「未明童話が新しい作家によってよみがえり、私たちのイメージを膨らませてくれた」などという感想が寄せられました。

（詳しくは「報告」特別展12頁で紹介しています。）

■関連イベント ワークショップ

「親子で作る 未明展のブックカバー」

菊池千賀子さん（ブックデザイナー）
〈白にち〉 10月15日
〈参加者〉 30組45人

この未明と交友関係のあった人びとの言葉を月替わりで1人ずつ紹介することにより、大正時代初期の小川未明の人となりに迫りました。

2月 相馬御風／3月 片上伸／4月 正宗白鳥／5月 岩野泡鳴／6月 中村屋湖／7月 徳田秋声

特別展

〈小川未明文学賞25周年記念 大賞受賞作品展〉

〈会 期〉 7月30日～8月28日
〈会 場〉 文学館市民ギャラリー
〈来場者〉 3801人

小川未明文学賞は、未明の文学精神である「人間愛と正義感」を受け継ぎ、未来を生きた子どもたちの心に夢と希望を育むことを目的として、平成3年（1991）に創設されました。

平成28年度は、小川未明文学賞創設25周年を迎えたことから、過去の大賞を受賞した24作品とその関連資料、大賞受賞者の受賞コメントやこれから小川未明文学賞を目指す応募者へ向けたメッセージなどを紹介しました。

来場者からは、「大賞受賞者のメッセージに感動した」、「自分が書いたものを応募してみようと思った」などという

「12冊の絵本」のアーティストである菊池千賀子さんを講師に、ワークショップを実施しました。

ワークショップでは、展覧会で紹介した絵本の表紙絵から、菊池さんと作家・装丁家の皆さんのご協力により、本展覧会のオリジナルペーパーを作成いただきました。これを使って、フランス装という装丁を教えていただき、素敵なブックカバーを作りました。

参加者からは、「きれいなカバーができて楽しかった」、「ブックカバーのデザインがすばらしく、夢中になって作った」などという感想が寄せられました。また、「鉛チョコの天使」の作家・杉谷知子さんの協力により、絵本の表紙絵をぬり絵としてご提供いただきました。これは子どもから大人まで大変好評で、思い思いの色を塗り重ねていました。

さらに、会期中の10月30日には、未明ボランティアネットワークの協力により、特別展合同おはなし会を開催し、31人の方からご参加いただきました。

特集展示

〈初出・初収録にみる 未明童話12のおはなし〉

〈会 期〉 10月8日～12月28日
前期：10月8日～11月11日
後期：11月12日～12月28日
〈会 場〉 文学館常設展示場

感想が寄せられました。また、会期中の8月7日と21日には、未明ボランティアネットワークの協力により、特別展おはなし会を2回実施しました。

特集展示

〈もう一つの未明文学賞〉

〈会 期〉 8月2日～10月2日
〈会 場〉 文学館常設展示場

特別展「小川未明文学賞25周年記念 大賞受賞作品展」の関連企画として、昭和32年（1957）に創設された「未明文学賞」について紹介しました。

「未明文学賞」は、小川未明の功勞を称える事業として、坪田譲治を代表とする「未明文学会」が創設した文学賞で、未明が逝去した翌年の昭和37年（1962）まで続けました。日本児童文学の振興を図ることを目的として、前年中に発表された優れた作品に授与されてきました。

特集展示では、当館所蔵資料の中から「未明文学賞の設立趣意書」や「坪田譲治のメモ」、未明が日記がわりに使用していたカレンダー（いずれも小川家寄託資料）などを紹介しました。

特別展「小川未明 12冊の絵本」の関連企画として、特別展で紹介する12作品の初出・初収録誌（復刻版含む）を紹介しました。

前期には、「金の輪」（南北社 1919年）や「海の彼方」の初出誌『週刊朝日』（1924年）など8点、後期には、「月夜と眼鏡」の初出誌『赤い鳥』9巻1号（1922年）、「気まぐれの人形師」（七星社 1923年）など8点、合計16点を展示しました。

来場者からは、特別展とあわせて観ることで「挿絵の魅力に感心した」、「未明童話の奥深さが実感できた」などという感想が寄せられました。

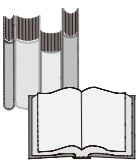
特集展示

〈未明童話「港に着いた黒んぼ」〉

〈会 期〉 2月4日～3月30日
〈会 場〉 文学館常設展示場

上越文化会館の自主事業（朗読とフラメンコで綴る小川未明「港に着いた黒んぼ」の応援企画として、所蔵資料の中から「港に着いた黒んぼ」を収録している童話集・全集18点を展示しました。

来場者からは、「読んだことがない作品なので、この機会に読んでみたい」などという感想が寄せられました。



〈小川未明 12冊の絵本〉関連イベント 「親子で作る 未明展のブックカバー」



〈小川未明 12冊の絵本〉



〈もう一つの未明文学賞〉



〈小川未明文学賞25周年記念 大賞受賞作品展〉



〈小川未明文学賞25周年記念 大賞受賞作品展〉チラシ

各種講座など

朗読研修会

〈日にち〉 6月17日・7月1日
・7月15日の全3回
〈会場〉 高田図書館会議室他
〈参加者〉 38人

橋由貴さん(朗読療法士・ヴォイスアーティスト)を講師に、朗読研修会を開催しました。
はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習の大切さを学びました。その後、未明童話「殿様と茶碗」、「砂漠の町とサフラン酒」を題材に実践的な朗読を行い、個々に講師から指導を受けました。

また、受講者の朗読の参考にしてみらうため、講師による「月夜と眼鏡」の朗読披露を平成27年秋に新設した展示場「未明の部屋」で行いました。

童話創作講座

〈日にち〉 6月26日・7月31日
・8月7日の全3回
〈会場〉 高田図書館会議室
〈参加者〉 15人

小川未明文学賞最終選考委員の佐々木赫子さん(児童文学作家)を講師に、短編童話の書き方について学びました。

文学館おはなし会

〈日にち〉 毎月第2・第4日曜日
〈会場〉 文学館ビックブックシアター

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、毎月第2・4日曜日の午後2時から未明童話のおはなし会(読み語り)を実施しています。

平成28年度は、4月の観桜会に合わせて第1・3日曜日もおはなし会を行いました。これをあわせると、年間合計25回実施し、323名の皆さんにご参加いただきました。

朗読ボランティアの皆さんは毎回さまざまなポスターを作成し、文学館入口に掲示しています。そちらにもご注目ください。

出張おはなし会

未明童話に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力で、出張おはなし会を実施しています。

平成28年度は、市内小学校12校と放課後児童クラブ10か所、合計22か所(761名)を訪問しました。

まず、作品のテーマや構成などについて基本的な講義を受けたあと、講師から受講者が創作した作品の講評を個々に受けました。さらに、受講者同士でお互いの作品について意見を交換しあい、今後の創作の参考にしました。

平成28年度は、小学生や高校生の参加がみられるとともに、受講者の作品の中から第25回小川未明文学賞の1次選考通過作品が2編、2次選考通過作品が1編ありました。今後の活躍が期待されます。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。

文学館講座

〈日にち〉 11月6日・11月20日
・11月27日
〈会場〉 高田図書館会議室
〈参加者〉 計67人

小川未明や特別展にちなんだ講座を3回開催しました。
講師は、第1回 中川貴雄さん(イラストレーター)「小川未明の童話を読んで絵本を作ろう」、第2回 中川理恵子さん(豊岡短期大学講師・百合女子大学他非常勤講師)「お伽噺から童話へ」

その他関連事業

第25回 小川未明文学賞贈呈式

〈日にち〉 3月25日
〈会場〉 文学館市民ギャラリー

小川未明の文学精神を継承するため、平成3年(1991)に創設された「小川未明文学賞」の大賞・優秀賞の贈呈式を行いました。

第25回小川未明文学賞には535編の応募があり、この中から、大賞は、ほんのりとした「蝶のくれたプレゼント」、優秀賞はかみやとしこさんの「ぼくの父ちゃん」に決定しました。

また、贈呈式オープニングイベントとして、市内小中学生による小川未明童話「港に着いた黒んぼ」の朗読がおこなわれました。「澄んだ声の朗読に心が洗われた」という感想が寄せられました。

小川未明連絡会議

小川未明連絡会議は、未明に関する活動に取り組む団体間のネットワークを形成し、連携・協力することにより未明顕彰事業のさらなる進展を図ることを目的に、平成28年度に設立しました。

谷小波と小川未明」第3回 北見隆さん(宝塚大学教授)「小川未明作品の視覚化と宮沢賢治作品の視覚化を比較して」でした。

文学館講座第1回 「小川未明の童話を読んで絵本を作ろう」

第1回文学館講座では、「はじめてよむ日本の名作絵どうわ1 野ばら・月夜とめがね」(株岩崎書店 平成28年発行)の挿絵を手がけた、イラストレーターの中川貴雄さんを講師に、未明童話を読んで絵本をつくる小中学生向けのワークショップを行いました。

まず、参加者が絵本にしたい未明童話を選び、それを読んで思い描いたイメージを、真っ白の画用紙に色鉛筆やサインペン、和紙やセロハン、モールなどの様々な材料を使って、思い思いに表現しました。

小学生の親子の参加が多く、「自分だけの絵本ができて楽しかった」、「子どもと夢中になって作った」、「未明童話を読むきっかけになった」などという感想が寄せられました。
(第2回文学館講座については、「報告」文学館講座10・11頁、第3回文学館講座については、「報告」特別展12頁で紹介しています。)

平成29年は小川未明生誕135年を迎えることから、未明の誕生日である4月7日に連絡会議参加団体の合同イベントとして、未明童話朗読会、小川未明生家の隣家・丸山蠟燭掛のご遺族である丸山澄男さんから「未明と丸山のおっかさ」と題した講演会を実施しました。

小川未明文学賞25周年記念フォーラム&ギャラリー展示

〈日にち〉 10月10日
〈会場〉 早稲田大学

小川未明文学賞が第25回の節目を迎えたことを記念して、未明の母校・早稲田大学において、10月10日に記念フォーラムが開催されました。

早稲田大学・小野記念講堂では、「小川未明と早稲田の児童文学」と題したディスカッション・自作詩朗読・「赤い蠟燭と人魚」の朗読とフラメンコが行われました。

小川未明文学館では、記念フォーラムの一環として開催されたギャラリー展示「小川未明と早稲田の児童文学」の開催に協力しました。この展示は10月10日から17日まで、早稲田大学・ウエタギャラリーで行われました。

第25回 小川未明文学賞贈呈式



第25回小川未明文学賞贈呈式オープニングイベント

文学館講座第1回「小川未明の童話を読んで絵本を作ろう」

童話創作講座

朗読研修会

文学館講座

平成28年度の文学館講座は、中川貴雄さん、中川理恵子さん、北見隆さんを講師に開催しました。

(第1回は【報告】文学館1年の記録8頁、第3回は【報告】特別展12頁で紹介しています。)

第2回「お伽噺から童話へ」

（巖谷小波と小川未明）（講座要旨）

中川理恵子さん（豊岡短期大学講師・白百合女子大学他非常勤講師）



巖谷小波と小川未明は、共に日本の児童文学史に大きな足跡を残した存在です。しかし、明治期の小波と大正期の未明の関係については、これまであまり言及されてきませんでした。これは、二人の作風が全く異なっているという事だけでは無く、未明に代表される大正期の童話は、大正7年（1918）発行の雑誌『赤い鳥』以前の子ども向け作品を否定したところから生まれた、という認識があるからでしょう。



巖谷小波は、明治42年（1909）2月毎日新聞誌上で、「詩のお伽噺とか情のお伽噺といふのが進んだ少年文学である。日本の少年文学は茲まで進んでゐない、又社會がかういふ風（かぜ）のものを容れる雅量も無いし、見識もない」と嘆息します。この翌年、明治43年12月に詩的で情的な小川未明の『おとぎばなし集 赤い船』が出版されるのです。まさに新旧のバトンが渡されたような事象ですが、この二人はそれぞれどのような思いで作品を生み出していたのでしょうか。二人を比較することで児童文学の特質について考えてみます。

■小波と未明の関係

明治3年（1870）生まれの巖谷小波は、明治24年（1891）少年文学叢

山樗牛（ちまぎう）が生前、日本のグリムは現れたがアンデルセンは未だ現れないと嘆いていたが、ついに現れた、それが未明なのだと認めています。（巖谷小波「未明君に就て（死んだ樗牛もうなづかう）」『童話研究』10巻8号 昭和6年）

■二人の児童文学論

二人は互いを認めていたようですが、それぞれの児童文学観はどのようなものであったのでしょうか。

小波は「少年文學辨」（巖谷小波遺稿『童話研究』19巻10号・昭和14年）において、少年文学について多くの人は教訓談だと解釈しているが、文学の趣味を与えることが重要だと述べています。グリムは葉（ハ）教訓の味がはっきりしているが、アンデルセンのような葉の味はしないがうま味があり、後から葉が効いてくるものが文学的だといっています。

教訓から切り離して子ども文学の自立を目指すとする姿勢が窺えます。

さらに、空想について、嘘らしい嘘であるお話の空想は、お話に面白さを付け加え、子どもに大きな夢を持たせて想像力を豊かにし、のちに理想を生むと、その重要性を述べています。

一方、未明は「童話校正の要點」（小川未明『童話研究（童話の理論と実際）』昭和7年）の中で、次のように子どもの文学の魅力を分析しています。

書第一編「こがね丸」の発表を契機に、日本の児童文化・文学を開拓発展させました。特徴は、子ども読者を明確に意識し、子どものために教訓的ではない面白い作品を目指したことです。

小波は、家業の医学を継ぐため幼い頃からドイツ語を学びましたが、ドイツ留学中の兄から贈られたオットーの『メルヘン集』に触れた経験等から文学への興味が生じます。17歳で硯友社の一員となり、『我楽多文庫』に当時珍しかった言文一致体で小説を発表し注目を集めました。自身の初恋に取材した、子どもが登場する作品が多く「文壇の少年家」などと呼ばれていました。

小波は、子ども向けの作品をお伽噺と呼び、多種多様な物語をお伽式に書き表しました。お伽噺は、心情描写や情景描写を細かくしないという点では昔ばなしと似ていますが、昔ばなしにはないつじつま合わせの理由づけがあり、ここにユーモアが生まれる特徴があります。さらに口演童話やお伽芝居も始めました。特に子どもの前で実際にお話をする口演童話の経験は、子どもの反応を直に体験でき、小波のお伽噺に大きな影響を与えました。

またベルリン大学東洋語学校に日本語教師として赴任しヨーロッパの子どもの文化を肌で感じた体験を活かし、多くの海外作品をお伽式に再話し子どもたちに提供しました。

のような話です。『赤い蠟燭と人魚』は陸に産み落とされた人魚の娘が人間に育てられ、最後は不吉な存在として売られてしまう話です。

『赤い蠟燭と人魚』は、北と南、海と陸、青と赤を対比させ単純化した世界が展開します。そこには、せめて子どもだけは明るい世界で暮らしてほしいと願う母の愛や、人魚の娘の、一生懸命やつても自分の居場所がないような感覚や他と異なる自分の姿を恥ずかしいと感じる思春期の姿、逃げ出すこともできない弱者である子どもの姿、拝金主義に染まってしまう蠟燭屋の夫婦など、我々の生活に繋がる要素が多くあります。未明は人魚の居る世界を示すことで現実世界の真実を、時を越えて映し出すことに成功しているのです。

同じ人魚の話ですが、未明の作品は、人間と姿が似ていながら全く異なる存在である人魚でなければ成り立たない物語でした。一方、小波は、怪奇の一つとして、子どもの興味を引き空想を楽しむために人魚を登場させているので、人魚でなくとも同じような面白さの作品は描けるように思っています。

■児童文学とは

昭和35年（1960）『子どもと文学』（石井桃子、瀬田貞二他 中央公論）が出版され、日本の児童文学は「子ども文学は、おもしろく、はっきりわかり

一方、小川未明は明治15年（1882）、新潟県高田に生まれ育ちます。9歳の時に『こがね丸』が発表され、小波のお伽噺を子ども時代に楽しむ経験をしていました。未明は特に外国と縁が深い育ちをした訳ではないのですが、早稲田大学在学中に坪内逍遙に認められ文壇デビューを果たすとき、これまでの日本文学には全く見られない西歐風の作品であることを評価されています。

■未明と小波の出会い

未明は20歳のときに東京専門学校（現早稲田大学）で、教師をしていた小波と出会います。子ども時分、小波のお伽噺を「明るく、面白く、限りなく懐かしもの」と感じていた未明は、当時愛読した作家は、こんなにも若く、朗らかな感じのいい人であったか、と思います。そして、「溢れる愛の中に子どもの魂と全く抱き得る、明朗にして純一な性格を有する天才」だからあのような作品が生まれたのだと悟ったといっています。（小川未明「小波先生」『童話36人集』付録 昭和6年）。

小波が未明を知るのは、未明が坪内逍遙の紹介状を持って「自分もこれから童話の方へ進んでゆき度い」と高輪の自宅に挨拶に来たときになります。小波はこの時まで未明を「一種ローマンチックの特性を有している人」と臆（おそ）気（け）に知っていただけでした。この後20年程すると、高

やすく」という「世界的な児童文学の規準」は通用しないとし、その筆頭に小川未明があげられました。『赤い蠟燭と人魚』は子どもの本にしてはわかりづらくネガティブだと言っています。この頃から未明童話は子どもの文学として否定されません。

小波のように怪奇として人魚が出てくる話の方が、わかりやすく、おもしろいのでしょうか。小波お伽噺が明治以降脚光を浴びることはありませんでしたが、未明童話は2000年頃から新たに絵本等が作られるようになります。

未明のような世の中の真実を映し出す空想と小波のような子どもを楽ませ想像力を養うための空想、はたして児童文学としてはどちらが大切なのでしょうか。『童話研究』10巻3号（昭和6年）には、「私の好きな童話」という特集があり、小波と未明が並んで掲載されています。小波は「アンデルセンもの」を挙げ、未明は「浦島太郎物語」と「子ども達のために（トルストイ）」を挙げています。それぞれ自分の作品とは異なるタイプの作品を挙げている点が興味深く、簡単な答えはないように思います。

私は、読者としての子どもをどのよう捉えるかということが大きく関わるだろうと考えています。

子どもらしさの価値が揺れている現代だからこそ、児童文学の研究が大切なのではないかと思います。

特別展

平成28年度特別展

〈小川未明 12冊の絵本〉

〈会 期〉10月8日～12月18日
前期：10月8日～11月6日
後期：11月19日～12月18日

〈会 場〉文学館市民ギャラリー

次代を担う子どもたちのために、生涯にわたりおよそ1200編もの童話をつくり続けた小川未明。未明が創りあげてきた多くの童話は、幾多の作家たちが描いた挿絵によって彩られてきました。それは未明童話が生まれて何十年もの歳月が流れた今日においても、変わることはありません。未明童話に魅了された作家たちが、高い芸術性をもって描きだした作品は、童話の世界の情景と童話を通じて語りかけてくる未明の心を、私たちに伝えてくれます。

本展覧会では、平成27年にギャラリイ・まある（東京恵比寿）の企画に賛同した現在活躍中の作家と装丁家22人の手によって新たに生まれた、未明童話の絵本12冊とその挿絵作品を紹介しました。

12人の個性豊かな作家たちが、未明童話の中から最も心ひかれた作品を選び、その感性によって水彩や版画、デジタル

CG、切り絵、刺繍など、さまざまな手法を用いて表現した新たな挿絵作品を、10人の装丁家たちがフランス装仕立ての絵本に仕上げました。

これらの作品を通じて、未明童話の奥深さと挿絵の魅力を感じる展覧会となりました。

また、関連イベントとして未明童話「赤い船」の作品を手がけた北見隆さんによるアーティストトーク・講演会（文学館講座第3回）を実施しました。

■関連イベント アーティストトーク・講演会（文学館講座第3回）

「小川未明作品の視覚化と宮沢賢治作品の視覚化を比較して」

北見隆さん（美術家、宝塚大学教授）

講演会では、美術家である北見さんならではの観点から、小川未明と宮沢賢治の作品に対する共通点と相違点についてご紹介いただき、それを目に見える形として表現したときに、どのような違いとなるのかをご説明いただきました。

さらに、展覧会会場では、展示中の自身の作品を前に、制作に関するエピソードなどをご紹介いただきました。

参加者からは、「制作秘話が興味深かった」、「作品の前で話を聞いて良かった」などという感想が寄せられました。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成3年（1991）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成29年度で第26回目を迎え、これまでに延べ12000編を超える作品が国内外から寄せられています。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第26回募集要項

◆募集作品

- ①短編部門（小学校低学年向け）
 - ：400字詰め原稿用紙20枚、30枚
- ②長編部門（小学校中学年以上向け）
 - ：400字詰め原稿用紙60枚、120枚
- ・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。
- ・A4サイズで縦書き。ワープロ等の場合は400字詰め換算枚数を明記。
- ・表紙に題名、筆名、本名、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号を明記。
- ・原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

平成29年10月31日（火）（消印有効）

◆入選作

・大賞（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

平成30年3月上旬（予定）

*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課
「小川未明文学賞係」
TEL 025-526-9603
FAX 025-526-9604
E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp



アーティストトーク・講演会（文学館講座第3回）「小川未明作品の視覚化と宮沢賢治作品の視覚化を比較して」



〈小川未明 12冊の絵本〉チラシデザインは菊池千賀子さん

後期の作品		前期の作品	
	「赤いガラスの宮殿」 絵：藤原ヒロコ 装丁：糟谷一穂		「金の輪」 絵：あさいとおる 装丁：松本力
	「野ばら」 絵：まるやまあさみ 装丁：松岡史恵		「赤い蠟燭と人魚」 絵：岡本よしろう 装丁：武中祐紀
	「王さまの感心された話」 絵：近藤美和 装丁：土屋みつほ		「海のかなた」 絵：三溝美知子 装丁：清原一隆
	「月夜と眼鏡」 絵：ナツコ・ムーン 装丁：諸藤剛司		「青い時計台」 絵：政岡勢津子 装丁：菊池千賀子
	「気まぐれの人形師」 絵：まつやまけいこ 装丁：松岡史恵		「飴チョコの天使」 絵：杉谷知子 装丁：白島かおり
	「赤い船」 絵：北見隆 装丁：菊池千賀子		「砂漠の町とサフラン酒」 絵：野見山響子 装丁：森枝雄司

受賞のひこうき

このたびは、「蝶のくれたプレゼント」を小川未明文学賞大賞に選んでいただき、本当にありがとうございます。

「蝶のくれたプレゼント」の蝶とは、日本を縦断するアサギマダラということです。アサギマダラについて知ったとき、そのドラマチックな生き方に感銘を受け、物語を書きあげました。

実は、小川未明先生の作品の中で一番好きな物語も、蝶の出でくるお話です。題名は「月夜と眼鏡」。はじめて読んだのは十数年前です。

とある晩、おばあさんが眼鏡売りの男からべっこうぶちの大きな眼鏡を買います。そのあと、指を怪我したとってたずねてきた美しい娘の具合を見るため、その眼鏡をかけると、そこにいたのは娘ではなくこちようだった、というお話です。おばあさんの家の裏にある花園で、いまを盛りと咲いた花が月の光に照らされている様は、きつとステンドグラスのように美しいのだから、読むたびにうっとりします。また娘が、香水製造場で白ばらの花から取った香水をびんに詰める仕事をしていることを語りますが、その場面では、本から白ばらの香りがたちこめてくるような気がします。「蝶のくれたプレゼント」を書いているあいだも何度か読み、そのたびにやさしい気持ちになりました。

受賞のお知らせをいただいたあと、「月夜と眼鏡」をあらためてじっくりと読み返し、おどろいたことがあります。おばあさんの買ったべっこうぶちの大きな眼鏡（に似た眼鏡）を、わたしもかけているということ。おばあさんの眼鏡の魔法の力をおかりしたような気持ちになり、あらためて大賞に選んでいただくことをうれしく思いました。

最後になりましたが、選考をしていただきました先生方、上越市の皆様方、小川未明文学賞委員会の皆様方に、心から感謝いたします。本当にありがとうございます。



第25回小川未明文学賞大賞受賞
権 なほ 「蝶のくれたプレゼント」

のばら

vol.13

未明ボランティアネットワークだより

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2017年5月31日

特別展おはなし会 未明の部屋 10月30日(日)

未明が住んでいた高円寺の書斎部屋を再現した『未明の部屋』で、秋の特別展のお話をしました。

未明に見守られているような緊張感もある中で、各グループの発表が行われました。

作品名

- ① 高い木とからす
- ② 金の輪
- ③ こまどりと酒
- ④ 千羽鶴
- ⑤ 水車のした話

担当グループ

- シャープの会
未明童話の会
グループさくら
グループ空
お話の会うさぎ



高波代表の挨拶

各グループは、子どもから大人まで、皆さんが楽しんでもらえる作品を選びました。未明が「何をたえようとしているのでしょうか」。聞いてください。



(グループさくら) こまどりと酒

自分の楽しみ(酒)より、小鳥を自然の中に開放してやったお爺さんのやさしさを感じ取ってほしいと思いました。



(グループ空)

おばあさんのやさしい心から繰り広げられる不思議な世界。やわらかな色彩の絵と篠笛の澄んだ音色が、幻想的なお話の世界をさらに盛り上げました。



(お話の会うさぎ)

雪国高田で少年時代を過ごした未明の寒い冬や大雪に閉じ込められた時の思いが伝わってくるお話です。会話の所を分担して朗読しました。

平成28年度の活動

- ・小川未明文学館ブックブックシアターおはなし会…全25回、延べ参加者323人
- ・出張おはなし会(小学校、放課後児童クラブ)…22か所、参加者761人
- ・特別展おはなし会(夏の特別展・秋の特別展)…全3回、延べ参加者55人
- ・会員の研修会(杉みき子さんの講演)

出張おはなし会 おもに小学校と放課後児童クラブへ行きました



(シャープの会) 中保倉小学校

「月夜と眼鏡」「赤いろうそくと人魚」を朗読しました。小川未明の説明もよかったですよ、と感想をいただきました。



(未明童話の会) 谷浜小学校放課後児童クラブ

広い部屋でのびのびとお話を楽しみました。元気に感想も話してくれました。



(お話の会うさぎ) 山部小学校

「くらげのおばさん」…波の音がする楽器の音がきれいで、本当に海の中にいるようでしたと感想をよせてくれました。

寄せられた感想文から

(学校の先生より)

- 読み聞かせていただいたお話は、子どもたちの心に染み込み、あっという間に絵本の世界に引き込まれ、登場人物の気持ちになってお話の世界を楽しむことができました。
- 小川未明の生い立ちをお話していただき、身近な方ということを実感し、お話を聞くことができました。

(児童の感想より)

- ぼくは小川未明を知りませんでした。でもお話を聞いてみて、いいおはなしだなと思いました。
- 私達の学校の図書室に、小川未明の本がたくさんあります。これを機会に、どんなお話があるか知りたいです。

文学館でのおはなし会 (毎月第2、4日曜に実施)



(グループさくら)

「月とあざらし」…終了後、子どもたちに自由にパネルに触れ、楽しんでもらいました。



(未明童話の会)

「子ねこをもらった話」…お父さんとおばあちゃんといっしょに楽しんだよ。

出張おはなし会、会員加入の連絡先
上越市文化振興課
〒943-0832 上越市本町3-3-2
TEL 025-526-6900
FAX 025-526-6903
E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について
ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

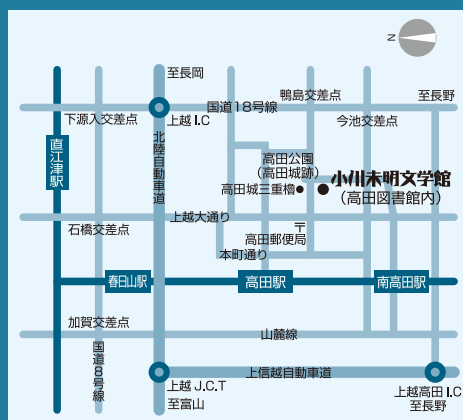
平成29年度 小川未明文学館カレンダー

- 4～5月 特別展〈小川未明文学賞大賞受賞作品展〉
会期：3月30日(木)～5月7日(日)
- 5月 小川未明文学館こども祭 5月13日(土)
- 6～7月 朗読研修会
6月9日(金)・6月23日(金)・7月14日(金)
- 6～8月 童話創作講座
6月24日(土)・7月29日(土)・8月5日(土)
- 10月 特別展〈中川貴雄が描く
「野ばら」「月夜とめがね」原画展〉
会期：10月7日(土)～11月26日(日)
- 第26回小川未明文学賞募集締切 10月31日(火)
- 10～12月 文学館講座（全3回実施）
10月28日(土)・11月11日(土)・11月18日(土)
- 3月 第26回小川未明文学賞贈呈式（東京）

*通年で所蔵品を紹介する特集展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
*毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて開催
*学校等での出張おはなし会を随時開催

問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL [http://www.city.joetsu-niigata.jp/
site/mimeihungakukan/](http://www.city.joetsu-niigata.jp/site/mimeihungakukan/)



入館料 無料

開館時間
火・金曜日 午前10時から午後7時
（6～9月は午後8時まで）
土・日・休日 午前10時から午後6時

休館日
毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）
休日の翌日・館内整理日（毎月第3木曜）
資料整理期間・年末年始（12/29～1/3）

小川未明文学館 利用案内